



あんげろす第66号

著者	手塚 奈々子, 遠藤 興一, 吉馴 明子, 齋藤 元子, 植木 献
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュー ースレター
巻	66
発行年	2015-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/2467

あんげろす

自然と人

手塚奈々子

1986年からイタリアのアッシジの聖フランチェスコ大聖堂と京都・栴尾にある高山寺は、異なる宗教間での兄弟関係にあります（教皇ヨハネ・パウロ2世主催。諸宗教間対話に連なる1つの実り。高山寺のパフレットには「兄弟教会の約束をした」とある。詳細は、河合隼雄／ヨゼフ・ピタウ著『聖地アッシジの対話－聖フランチェスコと明恵上人』2005年、藤原書店参照）。フランチェスコ（1182－1226）と明恵（1173－1232）は、自然を大切にしました。宗教が違うから自然の捉え方が異なりますが、自然破壊・環境汚染の進んでいる現代社会にあって、自然を大切にすることは、人を大切にすることにも繋がる大事なことと思います。



第66号

2015年3月

「体験としての世代間隔差」

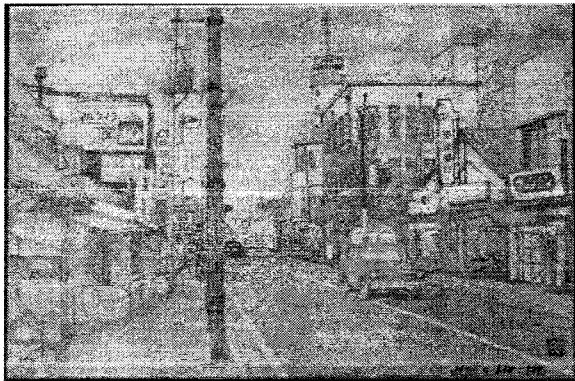
遠藤興一

いささか個人史めいた話をしてみたい。この3月で非常勤講師も終了、つまり明学の教壇とは永のお別れである。2年前に定年退職、研究室は既に引き払っているから、この後学内を訪れることはまずまずなくなる。と、感慨にふけりながら、ことはこれで一件落着かな。おっと、世間はそんなに甘くないらしい。何か書けというお達し。そこで歴史研究をなりわいとした者として最後に申し上げるなら、安部政権下の「戦後70年」目の今年、戦後史の転換点を踏み越える年になるだろうと予想する、それも静かにである。ここで世情の動きに触れるのが筋書きだろうが、それは又別の機会に。歴史を40年近く担当して、どうしても気にかかっていることがあった。社会福祉史は大きく分けると主体、対象、方法の三要素をそれぞれ部門としながら取り組む、問題史的な研究であり、原論と並ぶ基礎を構成している。実践主体といえば山室軍平、留岡幸助、賀川豊彦、あるいは阿部志郎といった先駆者たちのこと。方法といえば明学も先駆的役割を果たしたソーシャルワークの歴史。私はこれらを時に声を高く、時にボソボソと語り続けた。どちらかといえば可もなく、不可もなく繰り返す、いわばルーティン・ワークのそれであった。それでも、意図して力をいれたのは対象論である。そして、これが年度を追う毎、世代の代わる毎、私自身が老いていく毎に、学生との間で「可もなく、不可もなく」というわけにはいかなかった。例を挙げよう。「貧困」問題は救貧事業がそうであるように、最も古く、かつ基本的な対象論を形成する社会福祉の前提であることから、学生にはどうしても分かってもらいたい、つまり貧困を知らずして、君に福祉を語り給うことなかれ。在職40年を大ざっぱに区切ると、最初の10年間、学生の眼を見ても貧

困はすうっと入っていく様子が読みとれた。第2部(夜間部)があり、社会人入学が多く、レポートのおわりに自分の貧乏体験を「わざわざ」書き記し、講義にリアクションを見せてくれたこともしばしば。次の10年間は、史料だけでは心もとないので一高度成長のさなか一映像をしばしば使った、恩師天達忠雄先生の個人史を語ると、彼らは眼を輝かせて聴いた。さらに次の10年間になると、貧困は体験的にも社会観察の上からも、ほとんど知らない世代になっていた。みなさん、電車のなかで時折、「かつぎ屋のおばさん」たちを見かけたことがあるでしょう、と話の枕に持ってきて、キョトンとするばかり。無理もない、いないんだもの(本当はいたんです)。一番困ったのは貧しい人びとの集住地、スラム(細民街)の話をして、残飯を食べて飢えをしのぐ、というよりも常食にしていた人びとの暮らしをコト細かに話し出すと、学生たちはシラけてしまう。「この先生、趣味が悪いわね」といわんばかりに。それでも私は「綴り方教室」(東宝)を毎年、彼らに観てもらおう。そして最後の10年間、これはもう書く気がしない。学生たちの生育歴、階層性からいったって貧困、とりわけ社会福祉が扱う底辺層のそれを知ろうというモチベーションは全く持たない。いや、本当は違うのだよ、在るのだけれど「見えなく」なった、そして「見せなく」なった社会の仕組みが問題なのだよと、強く言わざるを得ない。かつては、語るうちに自然と共有することができたことが、語らなければ分からなくなり、ついには語っても分かってもらえなくなった。勿論、授業評価の低いことを学生のせいにしたくて、こんなことを言っているわけではありません。実にへたで、クソ面白くない授業をしてきたものだとつくづく思っております。一んで、そう、いったい私は何を言いたいのだろうか。キリ研の先生方は皆、分野は異なるにしろ、研究、教育はいわば至上命令である。かつて水落健治さんが退職に際

して本誌にキリスト教主義教育の難しさを、苦勞を交えて語っていたことを思い起しながら、私のように社会科学をメシの種にしてきた者も、埋めるすべのない世代間隔差の拡がり、いかんともしがたい「壁」であると嘆く。戦後史の検証、継承というグランド・セオリーまがいの話と直接つなげるわけにはいかないが、戦後70年の節目という今日は、確かに何が大きく変わり、何かが脱落していく境目に立っている。ん、うっかり忘れていたことがあるなあ。それは40年間授業で強調し続けたこと。若い頃、丸山眞男の「内村鑑三と「非戦」の論理」という論文に教えられ、非戦と福祉の関係を考えて論文にしたことがあった。非戦、反戦と福祉は構造的に切っても切り離せない、つまり福祉と平和のつながりを熱っぽく語ってきたのです。そして、今年も又、このことを語りながら、教壇を去ろうと思っている。

えんどう・こういち（名誉所員）



1971年4月高輪二本榎

『植民地化・デモクラシー・再臨論』その後

吉馴明子

岡部一興氏が世話人の横浜プロテスタント研究会の1月例会で、キリスト教史学会出版の『植民地化・デモクラシー・再臨運動』の報告会があった。この本の元になった2013年のシンポジウムは、準備段階で焦点が絞られず、個々の報告が交叉せず、惨憺たるものだった。出版の過程で大幅に加筆修正が行われ、3つのテーマが相互に重なるようになった。ご一読を願う。

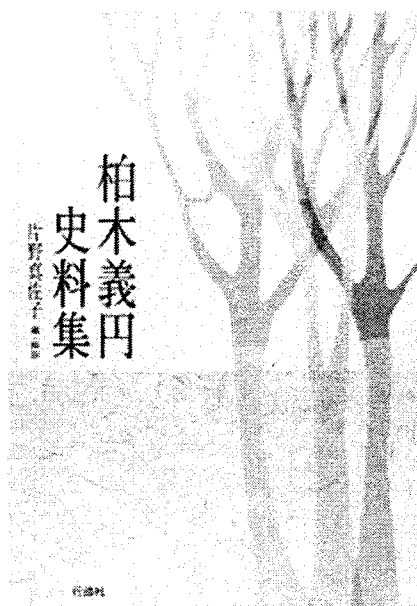
今回の研究会では、序論を書いた岡部氏が日露以後満州事変までの歴史を概観された後、鈴木美南子氏が吉野作造の生涯を追いながら実践面から彼の思想について報告された。吉野は国内的には貧しく弱い立場におかれた人々、国外的にも被支配の立場におかれた朝鮮の人々と、常に同じ人間としてつきあい、彼らを差別抑圧する原因を取り除く為に実践的に働いた。民本主義はただの政治理論ではなく社会の指導原理であり、その根本にあるのが「キリスト教人格主義」であったと、話された。2番目は原島正氏が「再臨運動」を短くまとめられた。大正政変をもたらした民衆運動のように、再臨運動は多くの人々を集めたが、それは大量回心を促すリバイバル運動ではなく、キリスト者を対象に、キリストの再臨による「世直し」を説く、キリスト者覚醒運動「種の撒きなおし」運動であったと、その性格を規定された。この運動で、社会の様々な不正・不平等、そして日清・日露戦争が、日本の他民族支配を強める利己的な戦争でしかなかった事が、明かされた。まさに「社会改良」を求めるといふ叫びであった。しかし、この「社会改良」は結局のところ、キリストの再臨において、神の側から与えられる他ないと、内村は言う。

内村のこのような再臨運動については、世界の根底的退廃をそれとして認識した上でなお、そこに神の歴史支配の「意思」を読み取ろうとし、安易な「進歩観」を覆したという積極的評価が藤田省三や松沢弘陽によって与えられている。他方、近藤勝彦は『デモクラシーの神学思想』において、民本主義も「人」の政治である以上「帝国主義」と異ならず、「平和」はもたらさない。「国際連盟」ではなく再臨のキリストの裁きと指導とによってのみ世界は救われるとの内村の言説を、歴史のリアリズムの欠落と批判している。

松沢と近藤とに代表される、相反する内村評価について考えあぐねていた12月中旬、『柏木義円史料集』の発行を記念してシンポジウムが開かれた。編者の片野真佐子の他、山口陽一、植木献ら3人の方々の報告を聞き、『弧憤のひと柏木義円』を再読して、『植民地化・デモクラシー・再臨運動』からは抜け落ちているキリスト者の言動を知った。コメンテータとなった私は討論のきっかけにと柏木の考えを紹介した。一つには、総督府寄りとされた組合教会で、湯浅治郎と柏木義円は吉野作造と共に、組合教会の「皇民化のための宣教」を批判したことである。キリストはもちろん、ローマ市民であったパウロでさえ「ユダヤ人の羅馬国民化を標榜して福音を宣伝」はしなかったと柏木はいう。堤岩里の虐殺にはおかむりを決め込む組合教会を批判し、朝鮮伝道において目指すべきは、「同化ならぬ異化」であるとも主張した。二つには、内村の国際連盟、デモクラシー批判に対して「一步にても世界を公義と平和に進めんと努力しつつある世界政策者の誠意の空しくならんことを小気味能く思」うなどは、「氏の反動的性癖の暴露」とする。柏木も神の国を現世社会の完成とは考えないが、社会や文明の進歩を軽視するのは、人の一生も所詮は「老衰死滅」とするのと同様「不健全の謬想」という。片野は「信仰の純化を求めて現世的関係の執着を断ち切った内村は、現実

の方向感覚を失い、内なる神の命によりあらゆる現世の出来事を裁断する「宇宙の正確な説明者」となってしまった、という。これでは、目の前で苦しむ人と共感することも、様々な問題の中に解決の糸口を見出すこともできない。同時代人柏木義円の福音に立つ社会への関わりの確かさに私自身強く印象づけられた。

よしなれ・あきこ（協力研究員）



『柏木義円史料集』片野真佐子編・解説、行路社、2014年7月。

明治学院の少年たちは英語で思考する

齋藤元子

明治学院大学図書館の貴重書庫に *Telling tales on Tokyo* と題する洋書が保存されている。『東京語り』とでも邦題がつけられそうなこの洋書は、大正期の刊行で、当時東京で活動していた米国長老教会の宣教師たちが綴ったエッセイを集めた随想録である。

この中に、明治学院の教師であったネーサン・ヘルム (Nathan Teal Helm) のエッセイがある。タイトルは“Meiji Gakuin boys think in English”、つまり「明治学院の少年たちは英語で思考する」である。

このエッセイは、実は、ヘルム自身の思いを綴ったものではなく、彼が授業で生徒たちに書かせた英作文を紹介したものである。数人の生徒の文章を翻訳してみよう。

最近まで、アメリカにおいて成功の尺度はお金であったという。私たちはそれを聞いて悲しく思った。というのは、私たちにとっては、忍耐・正直・儉約・正義・神への信仰・愛が成功の基本だからである。これらの資質が、ついには個人の立派な人格を形成する。この点からリンカーンとフォードという二人のアメリカ人の相対的な成功を見てみると、リンカーンのほうが、私たちにとっては、はるかに優れた人物に思える。なぜならば、彼は真に高潔な人物だからである。彼の正義感や仲間への愛情は不公平をなくすための戦いへと彼を導いた。リンカーンは永遠に生き、彼の魂は決して死ぬことはない。彼のゆるぎない神への信仰は私たちを鼓舞する。彼は神を心から信じていたがゆえに、命がけでことを成し遂げたのである。分裂の危機にあったアメリカを今日あるアメリカの姿に作り上げたのは、まさに彼である。

私たち日本人の家庭においては、父親が絶対的な支配者であるという場合がしばしばあった。しかしながら、父親が道理をわきまえた人物である時のみ、支配者たりうる。父親は独裁君主であってはならない。もし、父親が誤った判断を下したならば、私たちは父親に再考を求めたり、助言をしたり、忠告したりするべきである。実際、そのような時には、私たちは父親に服従する必要はない。家庭においては、お互いに歩み

寄ることが大切である。子どもたちや妻は自らが正しいと思っていることを主張する権利を持っている。神様が子どもたちや妻に授けた意志というものは尊重されるべきである。真実は無視することはできない。なぜならば、神の王国においては、父親も母親も子どもたちも皆平等だからである。

女性も男性と同等の活動や仕事の機会が与えられるべきである。現在の日本においては、女性たちは過度に家庭に縛られており、その現実を認めざるを得ないのはとても残念なことである。しかし、何らかの形で、この状況が改善される時が来るであろう。未来の日本の女性たちは、今日よく見られる修道院生活を思わせるような家に閉じ込められた状況から解放されるべきである。そして、各人の素養を生かして、好きな場所で働くべきである。だが、日本の女性たちは、映画に登場するある種のアメリカの女性たちのようになるべきではない。これらのアメリカ人女性は、夫を軽んじ、幾分傲慢であり、あまりに自由奔放で、よき妻にはなりえない。日本の女性たちは、夫を尊び、支えるべきである。日本の女性たちは堅苦しく、アメリカの女性たちは自由すぎる。中庸が望ましい姿である。

今日広まっている資本主義は望ましいものではない。資本家の中には、あまりに理不尽で横暴な人がいる。資本主義はある形態においては必要なものであり、容認できるものではあるが、資本家と労働者の間での協調が不可欠であり、相互扶助がベストである。農民や労働者や漁業民の生活は決してよいものではない。彼らの収入はあまりに少なく、悲惨な現状に満足しているはずがない。その一方で、富める者は贅沢な暮らしをしている。彼らは不幸な生活から抜け出し、社会を上昇していったに違いない。労働者の階層移動とい

う観点からすれば、このことはある程度許されるべきである。なぜならば、労働者は日本の発展にとって必要な存在だからである。

日本人の中には私たちのような主張をする者もいる。それは当然少数派意見ということになるが、その主張とは、私たちは理由や事情の如何にかかわらず戦うべきではないというものである。その理由は、私たちは戦争に従事すべきではないからである。戦争は国を破壊する。私たちは世界の平和に照らして行動すべきである。刀を持って立ち上がる者は刀によって倒れるに違いない。私たちは相互理解と相互愛によって国際問題を解決するためのあらゆる努力をしなければならぬ。

皆が真剣に世の中のことに目を向け、短文ながらも、きちんと自分の考えを英語にまとめている点に驚かされる。すべてが無記名のため、彼らがその後どのような道を歩んだのか追跡調査ができないのは残念であるが、大正期における明治学院の英語教育の水準の高さを垣間見ることができる貴重な史料である。

さいとう・もとこ （協力研究員）



雑録

最近もうすぐ2歳になろうとする娘が寝る前のお祈りを自分ですると言い出した。「わたしがする！」というので、どんなお祈りをするのだろうかと思い、試しに「じゃあお祈りしてください」と言ってみた。

すると枕の前で手を合わせて「伊万里(犬の名前)もすすく、小雪(近所の犬の名前)もすすく、お母さんもすすく、お父さんもすすく…」と祈り始めた。どうやら身近な存在が元気ですすく育ちますようにという意味らしい。

もうすすく育つ必要のない父親としては思わず笑ってしまう一言だったが、同時に普段家庭での祈りのあり方を反省させられる思いがした。

子供は親の祈る姿や言葉を見聞きして真似る。つまり、私はプライベートなところでは、結局家族が元気で幸せに過ごせますようにというありきたりな願望を祈りの形を取って吐露しているだけなのだ気が付かされたからだ。

一方的に自分の思いを誰かに投げかけるのはたやすい。けれども、神と私たちとの関係にとどまらず、身近な対人関係でも言えることだが、その行き着く先はささやかな幸せとはほど遠いものになる。

多くの願いの言葉を重ねるのではなく、むしろ耳をすまし、静かに神の言葉が与えられるのを待ち、それを聞くひとときにしなければと改めて思わされた。

2013年度前半に育児休暇をいただき、半年遅れて始めたキリスト教研究所の主任の仕事がこの3月で終えることになるが、研究所としての課題も同様なのではないかとふと思った。自分のやりたいことが課題なのではなく、いったんそれを脇に置いて、神にそして隣人に耳を傾ける姿勢を取って初めて見えてくるものに真摯に向き合うことが本来の課題なのでないかと。

そう考えると、この1年半の間本来向き合うことと

正反対の方向に行っていたのではないかと自省せざるを得ない。

娘が生まれた際に徐正敏先生から「子供が生まれて父となって初めて、父なる神さまの思いが分かるようになります」と励ましの言葉をいただいたことの意味がようやく少し分かったような気がした。父としては2年もなく、実はまだすくすく育つ必要があることにも気が付かされたのだ。

* * *

主任として十分な仕事ができず、みなさまにはご迷惑をおかけいたしました。短い期間ではありましたが、ご協力と共にご海容いただきましたことに感謝申し上げます。

うえき・けん（教養教育センター准教授、主任）

研究所活動（2015年1月～3月）

キリスト教芸術研究プロジェクト公開研究会

「キリスト教音楽の研究方法及び今後の課題」

開催日時：2015年2月28日（土）14：00-16：00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 92 会議室

パネリスト：井上 義（等々力教会牧師・聖契神学校講師）堀 朋平（国立音楽大学・武蔵野音楽大学講師）

司会&パネリスト：加藤 拓未（本学キリスト教研究所協力研究員）

2014年度3月研究会

開催日時：2015年3月5日（木）15：00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 92 会議室

発表①「教会と国家 中国の場合 一私の見た中国キリスト教会一」

発表者：渡辺祐子 所長

コメント：高井ヘラー由紀 協力研究員

発表②「バプテスト・アソシエーションの再検討」

発表者：大西晴樹 所員

コメント：植木献 主任

3月研究会後の懇親会（場所：目黒 yuuan）

開催日時：2015年3月5日（木）18：30-

開催場所：目黒 yuuan

震災後の日本における宗教的ミニストリーの理論と実践第1回シンポジウム

「21世紀に甦る賀川豊彦・ハル」

開催日時：2015年3月14日（土）13：30-17：00

開催場所：明治学院大学白金校舎 3203 教室

主催：東京基督教大学 共立基督教研究所

共催：明治学院大学キリスト教研究所賀川豊彦研究プロジェクト

協賛：賀川豊彦記念松沢資料館、キリスト新聞社

新着図書

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2015。
- ・『ドキュメント明治学院大学 1989—学問の自由と天皇制』岩波書店編集部編、岩波書店、1989年。
- ・『現代聖書注解 サムエル記 下』W. ブルッゲマン 著、矢田洋子訳、日本キリスト教団出版局、2014。
- ・『ATD 旧約聖書注解 9 列王記下』山吉智久訳、ATD・NTD 聖書注解刊行会、2014年。
- ・『説教黙想 アレテイア』No. 86、日本基督教団出版局、2014。
- ・『説教黙想 アレテイア』No. 87、日本基督教団出版局、2014。
- ・『キリスト教学校教育史話—宣教師の種蒔きから成長した教育共同体—』大西晴樹著、株式会社教文館、2015。（大西晴樹所員寄贈）

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第66号

2015年3月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

TEL: 03-5421-5210 / FAX: 03-5421-5214

Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩